

異文化コミュニケーション研究所

2011 年度活動報告

(1) 研究プロジェクト紹介

●「変容する異文化接触場面とグローバリゼーションの行方」(最終年度)

代表: サウクエン・ファン (本学留学生別科別科長・国際コミュニケーション学科教授)

研究協力者: 石田由美子 (ベトナムホーチミン市師範大学日本語学科講師)
高 民定 (千葉大学文学部准教授)
齋藤真美 (大東文化大学国際交流センター非常勤講師)
中川康弘 (国際交流基金シドニー日本文化センター講師)
村岡英裕 (千葉大学文学部教授)

〈研究概要〉

本研究は、グローバリゼーションの浸透とともに日本滞在が長期化しつつある外国人の言語問題(コミュニケーション問題を含む)に対する言語教育、言語政策を考えるための理論的な枠組を構築することを目的とする。外国人の言語問題に関しては従来、マクロな視点からは言語政策、移民教育、多文化共生社会の枠組で、またミクロな視点からは異文化コミュニケーションあるいは接触場面研究の枠組で扱われてきた。本研究では、従来、「日本語母語話者-日本語非母語話者」という範疇から研究されることの多かった接触場面研究に対して、そうした範疇に収まりきれない外国人居住者(例えば、日本語を含む複数の言語を日常的に使用する人、あるいは日本語を使用しない人)の言語問題を「接触場面の変容」として捉え直す。また、彼らの出身地域における言語環境の特徴を考慮し、特定の言語環境に影響を受けた1人の言語使用者としての外国人の言語問題を扱

う、ミクロとマクロの両方の視点を取り入れた接触場面の新たな枠組を創出する。

主な研究活動の予定としては、毎年度4-5回の研究会を神田外語大学または千葉大学で開催する。研究会では、専門家のみならず、生活者としての外国人を招き、内省報告や、話題提供などを通して、研究のネットワークを拡げていきたい。

また、国内調査では対象とする外国人居住者は非英語圏出身とし、出身地域によって抽出し、彼らの経験してきた言語環境と現在の日本での言語問題を明らかにする。出身地域の言語環境のタイプにバラエティを持たせるために香港、韓国、東ヨーロッパ、ベトナム、フィリピンの5つの地域の外国人を中心とする。また、日本社会における接触場面の全容を明らかにするために、ホスト側の日本人の言語使用の実態と言語意識についても調査を行う予定である。

●「ビジネス・エシックス」(最終年度)

代表: ギブソン松井佳子(本学異文化コミュニケーション研究所所長・英米語学科教授)

研究協力者: 加藤泰史(南山大学)

勝西良典(上智大学)

鳥田信吾(デュッセルドルフ大学)

モースミュラー(ミュンヘン大学)

〈研究概要〉

実施期間は3年である。本年度10月に本研究所主催のシンポジウムを開催した。(後述の(3)を参照のこと)

●戦後日本政治と外交(継続)

代表: 和田 純(本学異文化コミュニケーション研究所特別顧問・国際コ

〈研究概要〉

資料の整理を継続し、もっとも中心的な資料群の件名目録化をほぼ完了した。同時に、若手研究者との共同研究を開始し、資料の分析・位置づけを図るとともに、ドキュメンタリー番組の製作に協力し、成果の一部は書籍として刊行された。

(2) 学内講演会報告

- 第 75 回 (6 月 13 日) 「映像・音声・文章の翻訳——言語学者にとっての創造的かつ専門的展望について——」

ディオニシオス・カプサスキス (英・ローハンプトン大学大学院
翻訳上級講師)

6 月 14 日、イギリス・ローハンプトン大学で映像翻訳を教授していらっしゃるディオニシオス・カプサスキス先生の講演会が行われました。テーマは「映像翻訳」です。講演に際し、通翻課程のメンバーが、同時通訳を行ないました。

カプサスキス先生はギリシャ人ですが、在英 15 年とのことで、きれいなブリティッシュイングリッシュを話されます。話すスピードも、ルース大使ほどゆっくりではないものの、決して早口ではなく、同時通訳をする上ではほぼ理想的なスピーカーです。

印象に残ったお話をいくつか箇条書きにします。

・翻訳とグローバル化

→植民地の発達とともにあった動き。別段目新しいことではない。

- ・モノリンガリズムは、世界を席卷するところまではまったく行っていない。

→ただ、「インターネットの世界における英語はどのようなのですか？」と夕食の会場に向かう途中に質問したところ、「インターネットにおいては、モノリンガリズムがほぼ達成されたとも言えますね」とのことでした。

・英語が「リングフランカ」となった場合、翻訳を使うことは地域言語・地域文化・地域のアイデンティティーを強調することにつながる。逆に、英語を使うことは、自分たちの文化を少し失うことである。

→Q&Aの際、通翻課程3年の小沼君が「しかし、私は逆に、英語を使うことで自分の文化などを知ることがある。一概には言えないのではないか」と発言。カブサスキス先生も「非常に良い視点です」と語っていた。

・3年～7年ごとに、翻訳の需要は2倍になっている

→「しかし、それはEUの場合ではないでしょうか？加盟国が自国の言葉を使う権利が保障されており、必然的に翻訳量が増えているのでは？膨大なバックログがあるとも聞きますが。日本の場合は、そのあたりの事情は微妙です。外国に対する興味の衰えから、翻訳に対する需要も減っているような印象があります」と食事に向かう際に質問したところ、「EUに関してはそうかもしれません。しかし、先ほどの言葉は2003年に、カナダの学者が言ったことです」とのこと。

・翻訳・通訳をやるならば、外国語をマスターしているのはもちろん、母語に関しては究極の完璧さが求められる。私はギリシャに帰って新聞を読んでも楽しめない。細かい言葉のミスが気になってしまうからだ。

→言葉に非常に敏感になるこの感覚は非常に共感できた。

・字幕 vs 吹き替え。吹き替えは金がかかる。

・ Interlingual subtitling (2つの言語の間での字幕翻訳)

・ Intralingual subtitling (1つの言語の中での字幕翻訳。例えば聴覚障害者

用に、聞こえてくるものすべてを「犬の鳴き声」「銃声」などと翻訳する。または語学学習用の字幕など。)

→イギリスに留学中に、「トレイン・スポットティング」という映画が話題になった。何でもスコットランドが舞台なのだが、訛りがきつすぎて、イングランドで公開されるときには英語字幕が付いたとか。これも Intralingual subtitling になるのだろうか。

- ・ surtitles オペラなど、舞台芸術における字幕。舞台の上部や脇などに表示される。
- ・ intertitles 無声映画時代の吹き出し替わり、もしくは背景説明的に挿入される字幕
- ・ Audiodescription for the blind and the visually impaired 目の不自由な方のために、音声で状況説明などをする。NHKの朝の連ドラの副音声などがそれであろう。

講演が終わった後、時間を 15 分近く延長して(すみません)、合計 30 分近くの Q&A タイムを取りました。特に通訳担当の通訳生から質問が続出していました。なるべく一般の方からも質問をお受けしようとしたのですが、結果的に 2 人ぐらいだったでしょうか、質問をしていただいたのは。もっと手が挙げれば、通訳生の質問を削ってでもお時間をお取りしたのですが……。

最後に私から「翻訳には『賞味期限』はあると思われませんか？ 例えば日本にはシェイクスピアの翻訳がいくつもありますが、原作は 1 つのバージョンしかないのに、なぜ翻訳は「究極のバージョン」がないのでしょうか？」と質問しました。

カブサスキス先生のお答えは「それは、言葉が生きているからです。これからも時が経つにつれて、新たな翻訳が出てくるでしょう」とのことでした。私も内心同じことを考えていたので、非常に嬉しく思いました。

また、「通訳法Ⅲ」の受講生を引率して会場にいらしていた、通訳者の曾

根和子先生からも、同通を行なった通翻課程の学生たちに対し、お褒めの言葉を頂戴いたしました。本当に良くやっただと思います。私でも尻込みするような内容の通訳でした。(柴原智幸・英米語学科講師)

●第76回(6月27日)「Make A Difference ～心をつなぐ想像の力～」
中澤 武(早稲田大学、他 非常勤講師)

本講演では、「イメージは脳の第一言語である」という主張を中心に据え、想像すること、イメージを持つことが、コミュニケーションに大きな力を発揮し、また心をつなぐ力にもなるということについて語られた。

講師の中澤氏はドイツの啓蒙哲学を専門とし、10年間ドイツで研究生活を送った。そこでドイツの子供の歌に出会い、心をつなぐ想像の力に気づく。帰国後は、日本語コミュニケーション教育や翻訳・通訳に携わっており、ここでもイメージが大きな力を持っていると実感している。

講演では、実際に来聴者に①想起、②イメージショット、③再・認識という三つのワークが実践された。これらを通し、個人にはすでにイメージが構築されており、あらゆる言語的なメッセージや抽象的概念はすべて形にあらわすことができること、さらにそれらは関心をもち意識を向けなければ引き寄せることができないことが示された。そして、こうした潜在意識を解放させるためには、一步を踏み出すことが大切であると説かれた。将来こうになりたい、またはこうありたいというイメージをもち、それに近づくために一步を踏み出すことで新たなパースペクティブが開かれ、やがてはそれが自身の成長につながるのだという。加えて、その足かせとなりうるネガティブな感情をいかにコントロールするかについても伝えられた。感情を動かす要素には、ことば、姿勢、フォーカスが挙げられ、この三要素を効果的に使うことによって、感情をコントロールすることができるという。

質疑応答では翻訳・通訳の観点から質問が寄せられた。翻訳・通訳とイメージ化という観点から、母語から外国語に変換するほうが、イメージ化が容易なのではないかという疑問が挙げられた。これに対して、通訳・翻訳

には言語化という段階も存在しており、言語化は母語に変換するほうが容易であると考えられるため、どちらも困難さは同じなのではないかというのが中澤氏の見解であった。(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第 77 回 (7 月 12 日) 〈シリーズ: 親密圏の異文化問題を考える〉第 6 回
「留学生と本音で語ろう!」日本へのまなざし: 内と外からのせめぎ合い

3.11: Before and After

チャウ (本学留学生別科学生・ベトナム出身)

ヂエゴ (本学留学生別科学生・ブラジル出身)

カロリーナ (本学留学生別科学生・スペイン出身)

浦野祥吾 (本学英米語学科 3 年)

高橋まなみ (本学英米語学科 3 年)

田中 薫 (本学国際コミュニケーション学科 3 年)

東日本大震災以降、日本の留学生をとりまく状況は大きく変化した。また、日本や日本人に対する日本国外からの見方も震災前とは異なっている。こうした状況をどのように捉え、対応していくべきかについて、異なる立場から議論がなされた。パネリストはブラジル・ベトナム・スペインからの留学生 3 名と日本人学生 3 名の計 6 名、司会進行はギブソン松井佳子本研究所所長であった。

まず、パネリストによって震災時の体験が語られた。日本国内で地震を体験したパネリストはいずれも最初は日常的な地震だと感じたが、後に周囲の状況やメディアにより事態の深刻さを実感したという。

次に、震災後日本にいた留学生が抱えた大きな問題の一つとして、帰国問題が取り上げられた。日本内外でさまざまな情報が錯綜する中、彼らは帰国の決断を自分の意思でしなければならない状況にあったという。その際、決断の決め手となったのは母国の家族の心情であった。家族を説得することができた留学生もいたが、家族の強い要望によって帰国した留学生も多かったようだ。

さらに、留学生がこうした状況に置かれてしまった背景として、日本と

日本外でのメディアのギャップが指摘された。両メディアの異なる見解の狭間で、留学生はその情報の信頼性を自らの判断で解釈する必要があった。一方で、留学生寮の管理人からの情報がわかりやすく、信頼できたというエピソードも語られ、人的ネットワークの重要性が浮き彫りになった。

以上のような話を踏まえ、神田外語大学が非常時にどのような役割を果たすべきかという点で議論は発展した。これについてはフロアからも意見が寄せられ、留学生・日本人学生双方がもつ情報を共有し、ともに考えていくようなコミュニティづくりの重要性が強調された。

最後に、各パネリストにより、東日本大震災を体験した後の自分の意識の変化について、原発に対する持論や今後の自分のあり方について決意が表明された。
(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第78回(7月21日)「異文化コミュニケーションにおける英語、そして通訳の役割」

鳥飼玖美子(本学客員教授)

7月21日、本学客員教授である鳥飼玖美子先生の講演は大変な盛況で、会場となったクリスタルホールは満員で、立ち見の方も出るほどでした。

鳥飼先生には、15時より通訳翻訳課程の作業部会にもご参加いただき、カリキュラムの組み立てなどに関して貴重なご意見を頂きました。

講演会の開始は17時。通翻課程有志が同時通訳を行います。その準備のために30分ほど前から会場入りしたのですが、どうも配線がうまく行かず、2つあるブースのうち1つしか会場の音声が拾えません。

時間が来たので、最初に配線をしてくださったスタジオの方に応援をお願いして、柴原は司会を務めました。おかげさまで、ブースの配線もうまく行き、講演開始から15分ほどで同通が出来るようになったそうです。

さて、鳥飼先生のご講演ですが、大きく分けて「グローバル化の時代における英語の立ち位置」「グローバル化の時代における通訳者・翻訳者の

意義」という 2 つのテーマでお話されていらっしやったと思います。途中で様々な事例などにも触れていただき、分かりやすく内容の濃い講演でした。

昨今『グローバル化により、英語が国際共通語になった。日本人も国際社会で生き残るために、英語を学ばなければならない』と言われる。

しかし、国際共通語としての英語を使って話す場合、話す相手は日本人が英語の話し手として想定する、いわゆる『ネイティブ』ではない場合が多い。

であるならば、『国際共通語として身に付ける英語』そのものを、見直すべきなのではないか? というお話が前半に出てきました。アメリカ人やイギリス人の話す英語を「正解」と考えるような姿勢は変えないといけなくなるのでしょうか。鳥飼先生はスーダンの英語を例に「いわゆる『ネイティブスピーカー』の規範から見れば不自然に思えても、それが現状というもの」とお話されていました。

アメリカ英語とイギリス英語しか英語として認めないというのは、日本語で例えば、方言を話す人に対して「あなたの日本語は間違っている。日本語のネイティブスピーカーとは言えない」というようなものです。

鳥飼先生のお話が終わった後、質疑応答の時間もたっぷりと取っていただきましたが、会場からの質問が相次ぎ、申し訳なく思いつつも途中でまどめとなりました。

講演会がいったん終了した後も、来場した方々が鳥飼先生を取り囲んでいました。一段落した後に通翻課程の面々も鳥飼先生にご挨拶。質問にも丁寧に答えていただいたとのことで、みんな感激していました。

講演の司会を務めながらメモを取ったので、それをもとに講演の内容を詳しくお伝えします。時計をにらみつつ、しかも通翻の同通部隊の様子を見つつのメモ取りだったので、ミスがあるかもしれません。ご了承ください。また(S)は、柴原の私見を意味します。

- ・ 2003 年文部省「英語が使える日本人」行動計画(5 か年計画)
→日本で初めてと言っていいぐらい包括的な英語政策。

→Sel-Hi を設け、ALT を増やすなど。また、教員を対象に「悉皆研修」(全員の海外研修)を企画。

・20年ぐらい前から、コミュニケーション重視の英語教育。(スピーキング、リスニング重視)

→実効あがらず、産業界からハッパをかけられる。

→最後の切り札が、「早く始める」こと。

→しかし、小学校で英語を「教科」としては導入に踏み切れず。英語「活動」としてスタート。教える先生は専門家ではなく、教科書もないから「活動」。

・「グローバル化」で「世界の共通語は英語」という認識になり、「生き残るために英語を」という動きに。

→高校での英語の授業に all English が導入される。

(S 「生き残る」とは、どういう意味でしょう。ビジネス上のシェア争いに生き残ることが、すべてなのでしょうか？ 経済活動上の生き残りが、様々な教育の目標となっているのであれば、違和感を感じます)

・「国際共通語としての英語」なのであれば、話す相手は Native ではなく、Non-Native の可能性が高い。

→「身に付けるべき英語」を見直す時期なのでは？

→そもそも、文科省の指導要領には「外国語教育」とあって、「英語教育」とは書いていない。これは、外国語を通して、外国の生活や文化を学ぶのが目的であるため。

→「国際共通語としての英語」として、最低限の英語を身に付けるのであれば、別にアメリカの文化や生活を学ぶことは関係ないのではないかな？

・「国際共通語としての」英語というが、何が「国際共通語」なのか？

・World Englishes という概念があり、様々な国の人々が話す英語も「英

語」として認めようという動きある。

→しかしそれが行きすぎると、その英語は「共通語」として機能しない。
そういう英語では学んでも意味がない。

・発音に関して、よく言われる R と L の発音を苦手としていることは、コミュニケーション上の致命傷にはならない。

→それよりも子音の連結に注意。

→リズムも大切。日本語は平坦だが、英語は強弱のリズムがある。

・習得にかけられる時間に制約がある以上、「国際語としての英語」は、今までとは違ったとらえ方をすべき。

* 通訳翻訳について

・国際共通語としての英語、Globish なら、ボキャブラリーは 1500 語で OK と言われる。

→しかし通訳・翻訳のプロには妥協は許されない。そんな少ない語彙では務まらない。

・通訳者や翻訳者はいらなくなるのか？

→現状、通訳・翻訳の需要は減るところか増える一方。

(S 放送通訳に限って言えば、現場に立つ者として、需要は減りつつあるように感じます。また、一般の通訳業務に関しても、いわゆるボランティア通訳がプロ通訳者の市場を蚕食している状況です。通訳者を養成する通訳学校も、規模を縮小するところが相次いでおり、全体としてマーケットは縮小しているのではないのでしょうか)

→異文化コミュニケーションの能力を持つ存在としても需要がある。

(S これに関しても、そこまで求められる場が少なくなっているような印象があります)

→各国の英語がかなり違うので、やはりプロが必要。

・スーダンの英語は、一般的な英文法のルールに照らせば、文法的ミスがある。

→しかし英語はスーダンの公用語。であるならば、「このように英語を使っている」と認めるしかないのではないか。

→World Englishes は、それぞれの地域の人々が、英語の使用者として、英語を使いたいように使っていることを受け入れる考え。

→いわゆる「ネイティブ」の規範から見たら不自然に思えても、これが英語使用の現状というもの。

・グローバル化とは、ボーダレス化。

→かつてないほど、日常の場で通訳・翻訳が求められる。

→コミュニティー通訳の役割が重要に。

・EU (27か国) の方針は「Unity (Unified) in diversity (多様性の中の統一)」。言語と文化は多様性を保つ。

→1958年に、加盟国の公用語を「すべて」EUの公用語とすると定めた。

→現在23言語。

・年間1万1千回の会議があり、通訳者は常駐700人＋フリーランス。翻訳者は1200人で年間130万ページを訳す。

→翻訳を正しくできるような原文の書き方まで、翻訳者側が発表している。

(S ただ、EUの事例はかなり特殊であって、これをもって通訳・翻訳の需要が揺らいでいないとは考えられないと思います)

・2004年の時点で、通訳コストに年間1億ユーロ。翻訳コストに1.9億ユーロ。

→これはEUの全予算の0.8%。加盟国の市民一人当たり、年間2ユーロを負担していることになる。

→もちろん「コストがかかり過ぎだ」という反対の声もある。

→しかし EU の理念の根底にあるのは「母語で話すには、その人の権利である」という考え方。

(S もちろん統一するための政治的リップサービスという側面もあるとは思いますが、中嶋先生はこの考えをどう思うかお聞きしたいです)

・交渉ごとは母語でやった方が勝ち。

→だから通訳・翻訳者が大切。

・EU 加盟国は、1 개국 1 言語を EU に「母語」として申請できる。

・複言語主義

→それぞれの国の弱い言語（少数派言語）を学ぶように呼びかけ。

* 日本における法廷通訳者について

・50 以上の言語において通訳者が必要。

→人数が足りず、研修も試験もない。

・日本の法廷は、今までは法律のプロだけが参加する場だった。

→「裁判員制度」で、アマチュアが入るようになった。

→通訳によって、裁判員の心象が大きく変わる。

→通訳人の力量が、判決に大きな影響。

・2009 年 11 月の「ベリンス事件」では、「発言の 65% が誤訳された」として被告が控訴。

→「通訳の質による裁判のやり直しはしない」というのが日本の裁判所のスタンス。このため控訴は却下される。

・「結果として覚せい剤を日本に持ち込んだことについて、どう思うか」と問われた被告人の答えが、I felt very bad. だった。

→通訳人(法廷通訳として宣誓した通訳者が、「通訳人」)は「非常に深く反省しています」と通訳。

→通訳に正解はないから、これも絶対に誤訳だとは言えない。

→通訳人に同情的に判断するならば、「日本の裁判では反省していることを示すことが重要で、刑期などにも影響する。入れておいた方が被告人の弁護になると思った」のでそう訳したと考えられなくもない。

→しかし「解釈はしない。言われた言葉を『正確に』訳す」のが法廷通訳。(S「ああ、やられた!」とか「マジかよ!」とか、そんな意味合いだったのでしょいか)

・通訳や翻訳は、異文化コミュニケーションに立ち向かうこと。

→多文化共生が大切。それを可能にするのは「通訳・翻訳」

・単文化思考は脆弱。とは言っても、多くの言葉や文化を学ぶのは不可能。

→そこで通訳者、翻訳者の出番。

→通訳・翻訳を学ぶだけでも効果がある。

・バブルが始まるまでは、能力重視。英語が出来る社員は、社内で鍛える!という方針だった。

→それには時間とお金がかかる。

→バブル以降、教育資金などがなくなる。

→大学をはじめ、学校に圧力がかかるようになった。

・人間の価値を、TOEICで測っていいのか?

以上、国際共通語としての英語が、一般に考えられている方向性とはかなり違ったものになりえること。行き過ぎたNative至上主義に対してバランスを取ること。通訳翻訳の今後。コミュニティー通訳、とりわけ法廷通訳の難しさなど、様々な示唆に富んだお話でした。

●第 79 回 (11 月 15 日) 「生きる条件としての「言葉」—— 詩人ローゼ・アウスレンダーの生涯と作品から」

長澤麻子 (立命館大学文学部准教授)

講師の長澤氏は 20 世紀初頭のドイツの思想家を専門としており、本講演では旧ハプスブルク帝国出身のユダヤ人の女性詩人、ローゼ・アウスレンダーを中心に話が進められた。

本講演では、まず「言葉」について三つのポイントが指摘された。一つ目は「言葉と言語」、つまり、人間が言語とどのようにして身につけるかということである。二つ目は、「言葉の力」で、社会で生きる上で言語がどのような意味を持つかということを示す。例えば、自分が置かれた境遇が言葉を通して表現されるとき、その言葉はきわめて重要な意味を持つことになる。そして三つ目は「詩という表現」である。詩という言葉の断面を通し、私たちはその人の人生を見ることができる。すなわち、詩という表現は、そうした人間の人生が凝縮された言語の表現形態であるとされる。

こうしたポイントを踏まえ、講演ではローゼ・アウスレンダーの詩と言葉について、彼女の生涯をたどりながら考えていった。ローゼ・アウスレンダーの生涯を考えると、「異邦人性」というイメージがつきまとう。彼女は常に「異邦人」もしくは「共同体の外の人間」として生きていたのである。彼女には「ユダヤ人」「女性」「移民」という三つの点で異邦人性があり、これらが彼女の人生を大きく左右することになる。1900 年代という時代、彼女は家族や政治的環境の変化により、住居や国籍を何度も変えなければならず、ヒトラーの時代にはゲットーでの生活も経験している。このような彼女の生涯をたどりながら彼女の詩を読むと、短い言葉の中に彼女の故郷への思いや社会に対する不安などさまざまな心情が表現されていることが理解できるようになる。

質疑応答では、ユダヤ人について、また言語と自分との関わりについて議論が交わされた。人間と言葉とは近い関係にあり、グローバル化した現

代では、一人一人が自分の言葉を持っていることを理解することが重要だと最後に長澤氏は強調した。(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第80回(11月21日)「Philosophy as Translation」

齊藤直子(京都大学大学院教育学研究科准教授)

本講演の中心となった「翻訳」は、単にひとつの言語から別の言語に言葉を置き換えることを意味するものではない。それは、なじみ深いものの中で見知らぬものに会うこと、ひとつの言語や文化の中に新しい場所を見つけることといった、より広い意味での翻訳である。よって翻訳とは、その過程で自己の思考回路を見直し、疑い、自己の中の溝に気づくといったことを含めた人間と言語との本質的な関わりを示す意義をもつ。本講演では、アメリカの哲学者スタンリー・カベルの思想から、言語との関わりの特質としての翻訳、自己と他者との関わり、さらには自己と世界・社会との関わりをも含める生き方の様態が示された。

講師の齊藤直子氏は、さまざまな分野において翻訳をつとめ、その異文化経験から教育が国境や世代を超えて生涯続いていくものであること、また哲学が相互学習の過程であり、異文化間の翻訳を通してそれが深められることを確信し、アメリカで教育哲学の道に足を踏み入れた。

講演は、齊藤氏がカベルの『センス・オブ・ウォールデン』を翻訳した経験と関連づけられて進行した。彼女はこの翻訳を行った際、カベルの言語の日本語訳が出現することで、もとの言語の意味や定義が揺らぎ、異なる言語と文化間の深淵に落ちてゆくような感覚に陥ったという。そして、こうした翻訳が完全に合致されるものではないという特質を「翻訳としての哲学」とし、カベルの哲学を通して解釈がなされた。さらに、この特質が国際人として他の文化を理解するための教育をも示すことが指摘された。つまり、人は翻訳不可能なものとの出会いの中で、自己の言語や文化との関わりのところまで晒され、揺さぶられることによって、新しい目覚めが経験される。それが文化間の限界を超える条件にもなりうるのだという。質疑応答では翻訳に関してさまざまな質問が挙げられ、とくに文化翻

訳の問題について多くの議論が交わされた。

(今千春・留学生別科非常勤講師)

●第 81 回 (1 月 13 日) 「哲学への権利——国際哲学コレッジの軌跡」

西山雄二 (首都大学東京准教授)

コメンテータ: サウクエン・ファン (本学国際コミュニケーション学科教授)

豊田 聡 (本学国際コミュニケーション学科講師)

本講演では、哲学者ジャック・デリダが創設した研究教育機関・国際哲学コレッジの軌跡から、大学という場、人文学を学ぶことの意味、そして根本的にものごとを考えるとということについてさまざまな示唆がもたらされた。

講演会は、まず前半に国際哲学コレッジの記録映画「哲学への権利」が上映され、後半に講師である西山氏、そしてコメンテータおよびフロア参加者を交え、映画で取り上げられていた論点をめぐって討論が行われた。

西山氏によると、本学のような外国語大学にはどこか孤独で独り立ちした雰囲気のある学生が多いという。語学の学習は、できないことに直面することの連続で、孤独な作業だと言える。しかし、こうした自身の無力さを感じる経験をし、克服していくことが語学を学ぶことのメリットであり、ひいては人生を生きていく中で重要な要素となるのだという。

西山氏からは映画に関連したトピックとして「大学とは何か」、「言語と X」という二つの論点が挙げられた。一つ目の論点について、近代の大学は制度化されたものであるが、一方で、無条件にやりたいことを自分で考え、突きつめることができる場所でもあるという。すなわち、大学とは条件の中で自分のやりたいことを無条件に創造できる場所であると言える。また、二つ目の「言語と X」は、映画の「哲学と X」を言語に置き換えたものである。つまり、言語を基礎としながらも、政治や経済、文化などに

触れることで、世界観を広げていくことが重要なのだという。翻訳通訳の場合、言語で言語を問うことで、言語について新たな経験をすることになり、それが自身の言語をさらに豊かにしていくことにつながると言える。

コメンテータの豊田氏からは、国際哲学コレッジを野心的で余分な活動とし、そこにある人文学の未来はどのようなものであるか、またパンと水を得ている哲学者の世界は収入のない人びとの世界とはかけ離れているのではないかという問いが出された。

一方ファン氏からは、言語や言語学習が社会の変化によってその価値や位置づけも変わることに、また英語圏の学問の最終段階が Ph.D (Philosophiae Doctor) という形でみなされているが、実際は「哲学的なもの」という意味は含まれておらず、その手前の目に見える形式しか前提とされていないのではないかという指摘があった。

さらに司会の松井氏からは、哲学カフェのような場の必要性、問いに対する回答を得ること、キャンパスという場について質問が投げかけられた。西山氏は、哲学カフェのようなアマチュアから高度なプロまで存在することを認め、重視すべきはそれを連続性をもって捉えることだと主張した。また、哲学が根本を問うことであるなら、根本を問いながら目の前の問題の回答を求め、折り合いをつけることを学ぶのが大学であるとした。さらに大学という場は、そこを離れた後でも新しいことを学んだときに思い出すことのできる記憶の場所であると言及した。

フロアの学生からも多くの活発な質疑が行われ、講演会終了後の懇親会でさらに議論が深められたのではないだろうか。

(今千春・留学生別科非常勤講師)

(3) その他のシンポジウムなど

- 第3回国際シンポジウム ビジネス・エシックスを多角的に考える「生きること・働くこと——共通の価値創造に向けて——from CSR to CSV」(2011年10月6日・7日、於：神田外語大学クリスタルホール)

異文化コミュニケーション研究所 2011 年度活動報告

〈第 1 日目〉

パネル・ディスカッション「海外進出企業の職域内異文化と共通価値づくりへの取り組み」

司会・コメンテータ：豊田 聡（神田外語大学）

学生パネリスト：下山 旻々（本学国際コミュニケーション学科国際ビジネスキャリア専攻 2 年）

神田 瞳（本学国際コミュニケーション学科国際ビジネスキャリア専攻 2 年）

中村有沙（本学国際コミュニケーション学科国際ビジネスキャリア専攻 2 年）

パネル・ディスカッション「〈人間〉と〈労働〉について考える」

司会・コメンテータ：加藤泰史（南山大学）

パネリスト：岩佐宣明（愛知学院大学）

発表テーマ：人間らしい労働——CSV の哲学的含意

パネリスト：別所良美（名古屋市立大学）

発表テーマ：ベーシック・インカム の射程——労働と人間的活動

講演 “Communicating Corporate Social Responsibility policies on company websites: A 5 country comparative study from the world’s leading enterprises”

Carolina Gruenschloss（Beijing Normal University）

司会：ギブソン松井佳子

コメンテータ：岩佐宣明（愛知学院大学）

〈第 2 日目〉

講演「なぜ今〈価値〉が問題なのか？：はざま（In-Between）の立場から」

島田信吾（デュッセルドルフ大学）

司会：ギブソン松井佳子

異文化コミュニケーション研究 第24号(2012年)

コメンテータ: Carolina Gruenschloss (Beijing Normal University)

パネル・ディスカッション「“働く”とは を考える」

司会・コメンテータ: 川野真吾(神田外語グループ就職支援センター MOVE 担当)

学生パネリスト: 宮崎あかね(本学中国語学科3年)

山田梨裳(本学中国語学科3年)

中村友莉子(本学スペイン語学科3年)

川村瑞樹(本学国際コミュニケーション学科国際コミュニケーション専攻3年)

川崎裕季菜(本学国際言語文化学科インドネシア語専攻3年)

講演「日本社会での外国人の多言語使用と接触場面への参加」

サウクエン・ファン(神田外語大学)

司会: ギブソン松井佳子

コメンテータ: 岩佐宣明(愛知学院大学)

講演 “Management of the use of English in multinational companies in Central Europe”

Tamah Sherman (Charles University in Prague, Faculty of Philosophy and Arts)

司会: サウクエン・ファン(神田外語大学)

コメンテータ: ギブソン松井佳子

今年のハーヴァード・ビジネス・レビューに CSV=Creating Shared Value という新たな概念が提唱され、これまで主流であった企業倫理概念の CSR に代わるものとして注目され始めているが、これは単に企業と社会の共存共栄という Win-Win 関係に留まるものではなく、現代に生きる私たちの生き方／働き方に大きい影響力を有するものと考えられる。

今回のシンポジウムでは、これまで過去 2 回のシンポジウムで議論された CSR に関連する内容を踏まえながら、また異なる視座からビジネス・エシックスについて多角的に検討した。特に今回は学生諸氏に当事者意識を持って参加してもらえるよう両日ともに学生参加パネル・ディスカッションを設けて、〈生きること〉と〈働くこと〉を原理的および実践的な視座を援用しながら考え、議論し、積極的な学びの場となった。

海外および国内からお招きした研究者の方々は各々の専門分野からリアルイシューと密接に結びついた問題提起をしていただき、理論と実践両面から労働（働くこと）の意味と意義を深く考えることができた。